２０１９

はじめて出会う –創造における純粋な視点へのアプローチ–

Rediscovering What Touches the Heart

AD23　鳥畑 加奈子
指導教員　坂元愛史

１. 研究目的

あらゆるものごとに対して純粋な視点を持つことは、ものづくりに携わる人にとって重要な要素であり、それはもちろんデザインにおいても同じことが言える。本研究は、ものごとを純粋に見つめることの大切さと、それを体感することのできる場の重要性について考察、展開することを目的としている。

２. 調査と分析

ものごとを純粋に見つめることに対して過去にどのような表現方法があったのかを調べた。

フランスの小説家サン＝テグジュペリの小説「星の王子さま」では、「大切なものは、目に見えない」といった言葉など、子供の心を失ってしまった大人に向けての示唆に富んだ表現が見られる。またアメリカの実験音楽家 J・ケージが作曲した「4分33秒」は、楽譜に「TACET（休止）」とだけ書かれており、演奏が始まるのを待つ周囲のざわめきや雑音を聴くという作品である。観客は、雑音を含めたあらゆる音を聴くことで、「無音」や「沈黙」は存在しないということに気づかされる。このように、文学などの作者よる記号・文字表現あるいは本という物的表現や、音楽など演者による行為表現がある。また、これらの表現の中間に位置する「見る人が行為をする」空間全体を作品としたインスタレーション表現があることがわかった。（ケージの「4分33秒」は音楽ともインスタレーションともとれる）

３. コンセプトの立案

ものごとを純粋に見つめる、という行為は、上記のように様々な方法で表現され、人々がそれを認識するきっかけを与えてきた。しかし、その行為は実は誰もが幼少期に既に経験をしている。それはものごととはじめて出会ったときである。

そこで、ものごととはじめて出会ったときの喜び・驚き・恐怖などといった感情を再経験できるような場を提供することで、成長と共に失われがちな、ものごとを純粋に見つめる感覚を取り戻すきっかけとしたいと考えた。そして、それは特にものづくりに携わる者には重要な感覚だと考える。

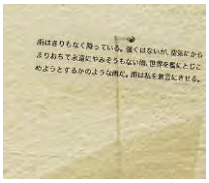
４. デザイン展開

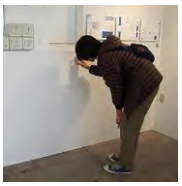
ものごととのはじめての出会いを表現するにあたって、水の美しさを純粋に魅せる作品や、「意味の解体」をテーマに本を分解し、意味の再構築を図るといった作品を展開してきた（試作及び学園祭展示作品）。しかしそれらによる出会いや発見はあくまでも作品の一方的なアプローチからなるものであり、物的な表現に留まっていたため、本研究で求めている「幼少期に経験したような出会い」の形とは異なっていると判断した。いかに自然な形で、ものごととの出会いを再経験させられるかを検討したところ、インスタレーション表現が最も適しているのではないかと考えた。インスタレーションには様々な方法があるが、見る人が行為をする方法の場合は、そこで得る発見や出会いには少なからず見る人の自由が与えられるため、最も自然な形での出会いを再経験できる可能性が高いと考えた。

５. 完成図

12月13（土）、14（日）に原宿デザインフェスタギャラリーでグループ展を行い、実際に検証をした。モチーフは「多くの人の身の回りにありふれているもの」を条件に検討した結果「言葉」に着目をし、空間をよく見ると沢山の言葉との出会いがあるという内容のインスタレーション表現を行った。

展示会場には、様々なジャンルの小説や詩から引用した40個ほどの言葉を透明なシール用紙に3～6ポイント程の大きさで印刷し、15．6平方メートルの部屋の壁3面に虫ピンで刺したものと、レーザーカットによるアクリル文字を水にうかべたもの、また床に直接置いたものを展示した。





６. 結論

展示会1日目は説明パネルの文章が長過ぎたため、自発的に体験をする人は少数だった。その反省を踏まえて2日目は説明パネルの文章量を大幅に減らし、実際に体験している写真を添えたところ、殆どの人がそのパネルを見て自発的に体験をし、「壁のシミや虫まで文字に見えてきて楽しい」「いつも何となく見ている文化もこうして見るととても面白い」「子供の頃なら見えていたものが大人になると見えなくなるのと同じように、大切なものに気づかされた気持ちになった」等の意見を得ることができた。よって、本研究の目的は概ね達成されたのではないかと考える。この検証結果を踏まえた上で、卒業研究展でも同様のインスタレーションを行う。

文　献

[1]片岡真実、佐々木瞳、川出絵里（編）
『リー・ミンウェイとその関係』 p156　美術出版社　2014